



千代田之御表狼煙上覧 (明治時代中期)

特集
展示

空中でまあるく開く打上花火は 日本で発明されました。

令和8年 7月11日(土)~9月23日(水)



東都両国橋夕すみの景 (弘化4年~嘉永5年(1847-1852))

会場：3階展示室

休館日：月曜日・第4火曜日(土・日・祝日は開館。祝日に当たる時は翌平日休館)

時間：午前9時~午後5時 *入館は午後4時半まで

入館料：個人100円/団体(20名以上)1人80円

※中学生以下と身体障害者手帳・愛の手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳をお持ちの方及び介助の方は無料

すみだ郷土文化資料館

墨田区向島2-3-5

TEL 03(5619)7034 / FAX 03(3625)3431

すみだ
郷土文化資料館
ホームページ



すみだ
郷土文化
資料館
SUMIDA
HERITAGE
MUSEUM

特集 展示

空中でまあるく開く打上花火は 日本で発明されました。

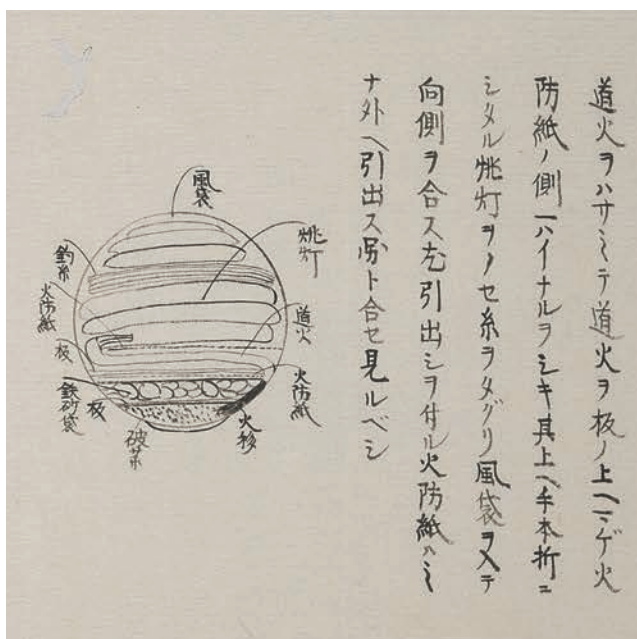
日本での花火の最初の記録は、文安4年（1447）3月21日京都の清浄華院^{しょうじょうけいん}で唐人（中国人）が余興で行ったものです。薄や桔梗、風車といった造形を、火薬を詰めて一方から火花を噴出させた筒を組み合わせて作りました。以降、日本は長く戦乱の世となり、次の記録は戦国大名伊達政宗に見せるため、同じく唐人が上げた花火でした。こちらは、文安4年の物よりも単純な構造でした。

泰平の世となり、花火の製作を日本人自身が行うようになります。隅田川では17世紀の後半には、武士も町人も手持ちの噴出し花火^{ふきだ}を楽しんでいました。筒に火薬の玉を仕込んで、火花と共に空中に上がる玉火^{たまび}も、この頃に現れました。これは、日本独自の工夫によるものです。

18世紀中ごろには、武士の狼煙技術^{うちあげ}から、ついに打上花火が開発されます。火薬の力が弱いので、空中での形は現在のように完全に球状ではなかったとの説もありますが、当時の技術書（作成マニュアル）を見ると、玉の構造は現在とまったく同じものでした。江戸幕府は隅田川での打上花火を禁止していましたが、19世紀後半には半ば公然と上げられていました。大花火や川開、上初めと呼ばれる、現在の花火大会のルーツとなるイベント型の花火は、この時期に始まりました。

明治14年（1881）、西欧の花火技術全般が『西洋煙火之法』^{えんか}によって紹介されました。日本で摂取されたのは、化学原料を用いた着色技術のみで、これにより江戸時代に独自の発達を遂げた技術を温存しつつ、緑や赤、明るい白色が出せるようになりました。

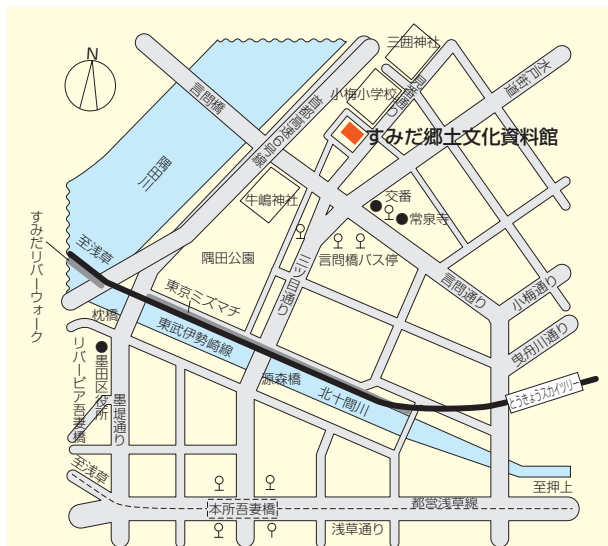
今回の展示では、独自の発展を遂げた日本の花火技術を、特に打上花火の技術に着目してご紹介していきます。



在心流火術極秘伝抄(文政7年(1824))



Sketches of Japanese Manners and Customs. (1867)



すみだ郷土文化資料館

〒131-0033 墨田区向島2-3-5
TEL 03(5619)7034 / FAX 03(3625)3431

- 都営浅草線「本所吾妻橋」駅下車、徒歩8分
- 東武線「とうきょうスカイツリー」駅下車、徒歩7分
- 都営バス「言問橋」下車、徒歩2分
(草39：金町駅～浅草寿町
業10：新橋～とうきょうスカイツリー駅
上26：亀戸駅～上野公園)
- 都営バス「本所吾妻橋」下車、徒歩8分
(都08：錦糸町駅～日暮里駅
門33：豊海水産埠頭～亀戸駅
上23：平井駅～上野松坂屋)